



うぐいすの石笛

【その4】

作:近藤せいけん



うぐいすの石笛 その四

清川村、宮ヶ瀬湖のほとり、一人の若者と
白ひげの老人に出会った

「おまえは、この人生で、何をしたいのじゃ」

「どんな自分に、なりたいのか」と、また微笑みながら、白ひげの老人は一つの石笛を取り出した。

「そう、若者よこの石笛を持ってゆけ」といわれ、「今日から三日後、この村を下った、厚木の飯山温泉に、ある男が泊る」

「その男は、朝、散歩に小鮎川（こあゆがわ）沿いを歩く」「この石笛を、山高帽の男に吹きなさい、さすれば、おまえの願いが届くであろう」

三日後、白ひげの老人の言われたように、厚木の飯山温泉に、行った。

石笛を吹いた。そののち、劇的に展開し、工学研究所 所長で、未来科学、ナノ科学の世界的権威の陣名 隼人（じんない はやと）博士に知り合い、指導、援助により、いままでの生活がガラリと変わり、充実した、忙しい、日々を送っていた。

「はじめ」は、毎日、工学研究所に通って、新しい知識を吸収しようと、懸命であった。

陣名所長、村木主任研究員は非常に、親切に解かり易く、新しい分野の未来科学、ナノ科学を教えてくれた。その上、はじめの清川村の父の工場で、応用して、仕事になるように、いろんな、アドバイス、専門の会社の紹介、仕事先の紹介、陣名所長の信用で、いろんな専門家の協力が得られるように、配慮してくれた。

半年後には、増築された、新工場に多数の機材が入り、新しい分野の製品づくりが始まった。忙

しい、希望に満ちた、日々を送っていた。

「お父さん、仕事が忙しくなり、人手がたりない。人材募集をしましょう」

「うう～ん、そうだね、こう、沢山の仕事の注文がくるのであれば、今のままでは、無理だ。」

「そうだね、急いで、やりましょう」

はじめは、人材募集のために、まず、ハローワークをはじめ求人広告を出した。

多くの若い、優秀な人材が集まった。

会社は陣容もそろい、益々、忙しく、活況に満ちていた。

季節はめぐり、白髪長い白ひげの老人に会って、石笛をもらってから、はや、一年が過ぎ、春を迎えていた。

清川村煤ヶ谷（きよかわむら、すすがや）の工場にも、春の息吹が感じられ、寒かった冬もゆき、日に日に、暖かくなってきた。

どこかで、うぐいすの鳴き声が聞かれる季節になってきていた。

はじめは、毎日、忙しい日々を送っていた。

従業員も、すでに、十数人を数え、益々、仕事量も増え、海外からも、注文が入るようになってきた。

会社の仕事に夢中で、忙しすぎて、ああ～っという間に、一年が過ぎた。

会社の仕事以外に、自分を振り返る、時間はなかった。

久しぶりに、早朝、工場の下を流れる、小鮎川（こあゆがわ）沿いを、散歩にでた。川の流れを見ながら、この一年を振り返っていた。

その時、川沿いの木に、一羽の鳥がとまった。

そして、突然、鳴き始めた。

「ホーホケキョ ケキョケ ケキョ ケキョ」心に澄み通り、揺さぶられる、美しい音色が、辺りに響きわたった。

「うぐいすだ～」

「そうだ、ご老人にお礼にいかなくては・・・」

「急ごう・・・」

うぐいすの石笛を持って、宮ヶ瀬湖に向かった。

湖畔はすでに、春の香りに満ちていた。

「はじめ」は石笛を取り出し、吹き始めた。「ホーホケキョ ケキョケ ケキョ ケキョ」心に澄み通り、揺さぶられる、美しい音色が、湖上を渡っていった。

すると、突然、音もなく、白髪長い白ひげの老人が立っていた。

「久しい、のう～。望（のぞみ）がかなったようじゃなあ」

「はい、本当にありがとうございました。教えていただいたように、厚木飯山温泉（あつぎいいやまおんせん）にゆき、山高帽の方に出会い、その方、陣名 隼人（じんない はやと）博士の援助で、人生が劇的に変わりました」

「今は、充実した、忙しい、毎日を送っています」

「そうか、それは、上々。・・・」

「チャンスは与えた。その後は、おまえの努力じゃ。日々の下ごしらいの上に、夢を信じ、己を

信じ、懸命に努力した結果だ」

「人生のチャンスは、いつでも、掴もうと信じ、自分の手を伸ばせば、そこにある」

「それに、気づかぬ人の、多きこと。」

「しかし、おまえは、わしを信じた。そして、己を信じ、一生懸命（いっしょうけんめい）生き、そして、掴んだ」

「良きかな、良きかな。ホッホホホ」

白ひげの老人はそっと、「はじめ」の肩に手をおいた。

そして、おもむろに湖面を、指さした。

「おまえは、人生のチャンスを生かした。」

「この石笛はもう、おまえには、必要あるまい」

「さあ～、石笛を、この宮ヶ瀬湖に沈めよ・・・」

「毎年。季節が巡り、冬が去り、春が来て、うぐいすの鳴き声が聞こえたら、このわしがいる宮ヶ瀬湖を、思いだせ。良きかな。」

「では、さらばじゃ～。良き、人生を歩め」

と言い残すと忽然（こつぜん）と消えた。

「はじめ」は持っていた、「うぐいすの石笛」を湖に投げ入れた。

「ホーホケキョ ケキョケ ケキョ ケキョ」と心に澄み通り、揺さぶられる、美しい音色を残し、静かに、沈んでいった。